

1 研究主題

「社会の形成者としての自覚をもつことのできる児童生徒の育成」

2 はじめに

本研究会は、令和3年度から「社会の形成者としての自覚をもつことのできる児童生徒の育成」という研究主題を設け、授業実践に取り組んできた。特に「社会の形成者としての自覚もつ」ということを「よりよい社会や幸福な人生の作り手となる自覚をもつ生き方」と捉え、自分のことだけでなく、社会全体のことに目を向けられる児童生徒を育成することを目標としている。また、研究主題に迫るための手立てとして、社会的事象に対し、当事者意識をもって、選択・判断・表現できる場면을授業の中に取り入れることに重点を置いてきた。本年度は特に、研究を通して新たに見つけた課題に対して検討を重ね、継続して児童生徒による「学び合い」を大切にしながら研究主題を追究していった。

3 研究のねらい

(1) 目指す子ども像

当事者意識をもって社会的事象を捉え、社会的な見方・考え方を働かせながら深く思考し、選択・判断・表現することで、社会の形成者としての自覚をもったり、高めたりすることのできる児童生徒の育成。

(2) 研究の仮説

当事者意識をもって社会的事象を捉え、社会的な見方・考え方を働かせながら深く思考し、選択・判断・表現することができれば、社会の形成者としての自覚が芽生えたり、高まったりするであろう。

(3) 研究の方法

手立て：児童生徒が当事者意識をもち、社会的事象に対して選択・判断・表現することのできる場面を設定する。

児童生徒が当事者意識をもてるような教材、発問、資料、ふりかえりなどの活動において選択・判断・表現できる場面を設定する。このような場面において、様々な角度や立場に立って深く思考することで、新たな考えを再構築し、社会的事象に対して自分の考えをもったり、行動を見直したりすることができると考える。

4 研究の過程

(1) 毎月、小学校部会、中学校部会の各分科会に分かれて、授業実践の報告をしてグループ協議を重ねた。グループ協議では、授業の指導案や授業の力点をまとめた授業実践報告書を持ち寄って研究を進めた。

(2) 研究授業の実施

10月 研究授業（米野小学校6年生 杉本教諭）

【戦国の世から天下統一へ】～信長のまちづくりとは？～

参加者：社会科教育研究会の小委員

11月 研究授業（味岡中学校1年生 山田教諭）

【世界の諸地域】～アマゾンの開発を進めるべき？止めるべき？～

参加者：社会科教育研究会の小委員

どちらも研究協議を通して研究授業の分析をし、これまでの研究の成果と課題の共有をした。

5 研究の実際

毎回の研究会の中心となったのが、各分科会に分かれて行った授業実践報告の共有とグループ協議による研究である。年度初めに担当割り振り計画を作成し、毎回の研究会で担当教員が、研究主題に迫るための手立て沿った授業実践を報告し、グループ協議を行った。資料・教材の扱い方や関連資料についての情報交換だけでなく、模擬授業形式での実践報告もされるなど多くの工夫が見られる会となった。そして、研究会後にも若手教員と経験豊かな教員とが情報交換する様子も見られ、有意義な時間が確保できている。また、小委員を中心とした毎時間の研究会の進行や運営に対する反省、研究に対する方向性の検討、研究授業の検証についても濃密に行うことができた。

10月に行った小学校での研究授業では、信長の行った小牧のまちづくりという、児童にとって身近な題材の提示から授業を展開し、多くの疑問を引き出し、本時のねらいに迫る授業展開がなされていた。授業の中で、児童は、資料をもとにしながら、職業ごとに家屋がまとまっている理由や小牧にまちをつくる意義などを意欲的に話し合う姿が見られ、当事者意識をもって追究することができていた。授業の最後のふりかえり活動では、新たに出てきた疑問も含めて自分の言葉で記述できているふりかえりも見られた。

11月に行った中学校での研究授業では、生徒の疑問やつぶやきを大切に、そこを出発点にしながら授業を展開する中で、本時のねらいに迫る授業展開がなされていた。授業では、資料集を中心としたさまざまな資料から、南アメリカ州の開発のメリット・デメリットをとらえ、このまま開発を進めるべきか、やめるべきかについて、社会的な見方や考え方を働かせながら深く追究することができていた。授業の最後のふりかえり活動では、資料や話し合ったことをもとに、開発の是非について自分の言葉で記述できているふりかえりも多く見られた。

6 今後の課題

昨年度から継続した研究主題により、それに沿った授業実践を行うことで、研究会全体で同じ方向を向いて実践に取り組むことができたと感じている。また、選択・判断・表現する場面も授業の導入部や追究する時間、振り返りの時間など幅広くすることができるため、多種多様な方法で、児童生徒が考えられる実践報告が見られた。この研究の積み重ねが教科指導の実践力や指導力を向上させる上でも効果的だったのではないかと感じる。

研究授業では上述した通り、研究の方針に沿った一定の成果を上げることができたと考えている。しかし、1 単位時間の子どもの変容であっても、既存の内容との関連が多くあるため、単元観をもった上での学びの保障が必要となってくる。来年度の愛日研究集会での発表に向けて、研究会での毎回の授業実践報告の中で、これまで通り 1 単位時間での授業実践から研究を進めるだけでなく、単元構成から検討した授業実践の研究を重ねることも可能な限り進めていきたい。特に今後の研究授業の中では、単元構成からしっかりと授業を組み立て、研究主題に基づいて設定した「目指す子ども像」の実現に迫るための手立てについて、子どもの変容を長い期間で見ながら研究の検証を重ねていくことで、これまで以上により深みのある研究をしていきたいと考えている。